
ゆうや君は異世界に召喚されました

茶助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゆづや君は異世界に召喚されました

【Nコード】

N2709V

【作者名】

茶助

【あらすじ】

無責任じゃないですか？

ゆうや君はある日異世界に召喚されました。きれいなおひめさまやかっこいい騎士さまがゆうやくんを説得します。

「どうか魔王を倒してください」

そんなこと言われても、とゆうや君はつつばねますが、頼る人もいない世界で無一文のゆうや君には城から逃げても行く宛がありません。結局押し切られてしまいました。

しぶしぶゆうや君はお城で戦い方を学ぼうと騎士さまに教えを乞いました。が、「魔王に勝てない私の戦い方では意味がない」そんなことはありません。もとより敵うとも思えませんが、心構えだけでも変えていこうと思っていたゆうや君に間違いはなかったはずです。

しかしお城の人々は騎士さまにうんうんと頷くだけでゆうや君を身一つで城から追い出そうとします。

これにはゆうや君も真っ青になりました。最近はずっと白い顔がデフォルトのゆうや君でしたが、真っ青というのは文章表現でしかなく、この時ばかりは白も青も通り越して黄色のまだら模様になってしまいました。

「ぼくを殺す気ですか!？」

魔王に挑むというだけでもゆうや君は死にそうな気持ちだったというのに、お城の人々はゆうや君が「勇者」だからとそれだけで納得してしまつらしく、ゆうや君の訴えに不思議そうな顔をするだけです。

身一つ着のまま装備なしレベル0の勇者ゆうや君にまともな戦いが出来るとは思えません。これならよっぽど騎士様のほうが強そうですね。もしかしたら大臣さまにも負けてしまうかもしれません。平和主義という建前でビビりを隠してきたゆうや君には、あまりにも荷が重かったのです。

ゆうや君はまわりの人々に「ぼくにはできない」と正直に話しまし

た。

お姫様は「そんなことはありません。あなたは勇者様であられますもの」と言いました。みんな同じ思いでした。

この国に住む人々にとって「勇者」とはそれだけ絶対的な制度です。つい6年前に召喚したばかりの勇者もはじめはいろいろとごねたものですが、最後にはしっかりと「魔王」を倒してくれました。

今までの勇者も最後には魔王と闘ってくれることを決意して城を出て行きました。その後は決まってどこかに消えてしまうのですが、国の人々が気にすることじゃありません。

魔王が消えた。重要なのはそれだけです。国を脅かす悪いものが消えればそれ以上に喜ばしいことはありませんから。

勇者さまはみんなもとの世界に帰っていったのでしょうか。

「どうしろっていうんだよ…」

そんな国民の期待を一身に背負ったゆうや君は、形だけの剣を持って途方に暮れていました。

渡された鉄の剣は、ゆうや君ではとても持っていられないほど重く、杖のように立てて体重を預けるくらいしか出来ません。

これでどうしろというのでしょうか。

魔王は北ににいるということしかわからないゆうや君には、街道をどちらに進めば北に行けるのかもわかりません。食糧もあと数日分しか持たないでしょうし、このままでは餓死するばかりです。

そんな時、がさがさと茂みから出てきたのはモンスターです。

これ以上ないほど危機的な状況で、ゆうや君は狼のような化け物に怯えるばかりです。

目はぐるぐると焦点が定まらず、ぱっくりと開いた口からは糸のような触手がいくつも出ていました。

おぞましい化け物の姿にゆうや君は腰が抜けてしまい、地面に座り込んでしまいました。

絶体絶命です。

しかし化け物の攻撃がゆうや君に届く前に、化け物は横に吹っ飛んで行きました。

首を横に逸らすと、髭の生えた筋骨隆々の男が弓矢のようなものを構えてこちらを伺っています。ぴくぴくと痙攣していた化け物が動かなくなった頃、男はゆうや君に声をかけました。

「新しい勇者か？」

男はゆうや君を待っていたそうです。男は21年前に召喚された元勇者で、同じようにろくな手立ても持たないのに勇者として担ぎあげられたそうです。

たしかに勇者と呼ばれた人間はみんな、この世界の人々よりはちよつとだけ体が頑丈に出来ています。ですが食べるものがなければ餓え死ぬのも、崖から落ちれば大けがをするのも、この世界の人々と変わりません。

ほんの少しの違いしかありませんから、一人で魔王に挑むことはおろか、この世界に生きる野生の動物にも勝つことは難しいでしょう。先ほどの狼もどきも魔王の手先の「モンスター」ではなく、この辺に生息している野生動物だそうです。

そもそも、「魔王の配下のモンスター」なんてものはこの世界にいません。魔王はモンスターの親玉でもありません。

ただの人間です。

不都合な相手を「魔王」と呼んで、便利な殺し屋「勇者」を無償で使っているだけです。

今までの勇者が殺してきたたくさんの魔王達も、特別な力を持たない人間でした。

勇者と呼ばれた少年達は、あらゆる手段を使って魔王を殺してきました。

毒殺や暗殺などもメジャーです。中には正面から斬りかかりに行く無謀な勇者もいましたが、あえなく取り押さえられたものです。なぜそんな無茶をするのか。それというのも、「魔王が勇者を恐れて殺そうとしている」「魔王を倒した勇者はもとの世界に帰っている」という話があったからです。

脂ぎった皮膚の凡庸な男が魔王だと知っても、極限状態に追い込まれている勇者たちは手を下しました。希望がそれしかありませんでしたから。

もちろんそんなことは出来ないと諦めてしまう勇者も大勢いました。むしろ、数でいえばそちらの方が倍はいるでしょう。

ですが、それなら新しい勇者を召喚すればいいだけの話なのです。一年に9回以上、多いときには一カ月で2回の早さで勇者を召喚してしまいます。

かつては国の大事に、伝説の救世主として召喚された「勇者さま」も今や気軽に呼び出せる便利屋です。もちろん「勇者さま」ですから普通の人間とは違います。ちょっとくらいの無茶は問題ないでしょう。

それで、魔王を倒せば元の世界に戻れるかというと、ありえない話です。

遠い昔に召喚された「偉大な勇者さま」は無事もとの世界に帰って行ったという話ですが、その帰るための技術はずっと昔に失われてしまいました。

今では魔王を倒したところで、殺人犯として捕まるだけです。

この国は腐りきっているのだと元勇者は言いました。

「俺達はこの国を心の底から憎んでいる」

誘拐されて、無責任に放り出された揚句にこのざまです。

ゆうや君は男の言葉に同意しました。

無理やり勇者にされた元勇者たちは束になり、国を滅すために動いているとのことでした。

平和主義のゆうや君でしたが、今回はかりは陰ながらも勇者同盟の力になろうと決心しました。

（後書き）

胸糞も後味も悪い話でしたがいかがだったでしょうか？

読んでくださりありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2709v/>

ゆうや君は異世界に召喚されました

2011年10月9日13時51分発行